

公判部 中核事務官

国家公務員一般職（大卒程度）採用・理工学部出身・入庁16年目・男性

01 PAST

——営業の「伝える技術」で、裁判員裁判を支える

Q：入庁前のどんな経験が、現在の業務に生きていると思いますか。

A：以前、**民間企業で営業職として働いていた際に身につけた「伝える技術」が、現在の大阪地検公判部での業務に直結している**と感じています。

私は普段、裁判員裁判の円滑な進行をサポートする業務を行っています。裁判員裁判に参加される方々は、刑事事件に馴染みのない一般の国民の皆様です。そのため、**複雑な事件内容をいかに分かりやすくお伝えする**が重要になります。前職時代、お客様に商品の魅力を伝えるために試行錯誤して身につけた**「情報を適切に取捨選択するスキル」**や**「視覚的に分かりやすい資料を作成するスキル」**は、分野こそ違いますが、複雑な情報を整理・説明する現在の業務において大きな強みとなっています。

分かりやすい情報発信は、司法に対する国民の皆様の理解と信頼を深めるための第一歩ですので、今後も、専門性の高い内容をいかに身近な言葉で届けられるかを追求し、開かれた司法の実現のため貢献していきたいです。

「他業界で積み上げた経験は、大阪地検という舞台で自分だけの強みに必ず変わっていくので、転職を考えている人には、大阪地検を選択肢の一つとしてぜひ考えていただきたいですね。」

——仲間に支えられ、己を高め続ける

Q：現在の業務に従事する中で、困難さを感じることはありますか。また、そのような困難に直面したとき、どのように乗り越えていますか。

A：大阪地検には、非常に優秀な検察官や検察事務官が多くいらっしゃいます。そうした方々と共に仕事をしていると、**その圧倒的な知識量や経験に裏打ちされた洞察力を前に、己の無力さを痛感すること**もしばしばあります。しかし、**そこで立ち止まるのではなく、自分とそうした方々の間にある差を「自分の成長の伸びしろ」として捉える**よう心がけています。「**捜査官としてレベルアップするためにできることは何か**」を常に問い**続ける姿勢**が、自分自身を一段上のステージに引き上げてくれると信じています。

Q：大阪地検という職場の雰囲気について、感じていることを教えてください。

A：大阪地検には、**上下関係を越えて本音で語り合える風通しの良さがあります**。難題に直面しても、周囲に相談できる組織風土が整っており、僕自身、ユーモアを交えながら知恵を貸してくれる上司や同僚の存在に何度も助けられてきました。大規模庁ゆえに複雑で難解な事案が舞い込んでくることも多いですが、どんなに難しい事案でも大阪地検のメンバーがいれば大丈夫だと思います。**日本屈指の規模を誇る大阪地検だからこそ経験できる仕事と、そして何より「かけがえのない同志」に出会えたことが、私の誇りです。**

「自分を磨き、仲間を信じる。その愚直な積み重ねの先に、揺るぎない正義があると信じています。」

——予測する力を武器に、さらなる高みへ

Q：現在の業務に従事する中で、どんなスキルが身につきましたか。またそのスキルは、今後、自身の成長のためにどのように生かせると思いますか。

A：前提として、どんな組織のどんな部署であっても、ただ漫然と業務をこなすだけで身につくスキルはありません。「**自分は何を習得したいのか**」を常に自問し、**そのために今すべきことを逆算する姿勢こそが成長の鍵**となります。

その上で、現在の業務を通じて磨かれた私の最大の武器は、「**周囲が求めているものを察知し、先回りして動くスキル**」です。他の職員がまだ気づいていない懸念点を洗い出し、次に必要となるアクションを予測して準備しておく。これは、**現場の意思決定を迅速かつ最適なものにしていくのに必須である、組織を下支えする行為**だと思います。これからもこのスキルを磨き、**個々の事案に潜むリスクを未然に防ぐことで、適正な刑事手続を遂行し、国民の皆様の検察庁に対する信頼を高めていけるような検察事務官**になりたいです。同時に、周囲に頼られるような人間にもなりたいですね。周りの検察官や検察事務官から、「あなたと一緒に仕事ができてよかった」と言ってもらうことが、いま私の目標です。

「共に働く仲間への敬意や感謝の気持ちを忘れず、自分を高め続けたいです。変化し続ける司法の現場で、常に結果を出し続けられる存在でありたいですね。」